

雪国の県立看護短大はじめの物語

著者	桑野 タイ子
雑誌名	新潟県立看護短期大学紀要
巻	9
ページ	39-41
発行年	2004-03
URL	http://hdl.handle.net/10631/570

雪国の県立看護短大はじめの物語

初代学科長 桑野 タイ子

県立看護短大が短い年月だったがその役割を終えようとしている。看護関係者をはじめとする県内各界の大勢の方々から大きな期待をうけて発足した短大であった。そのはじめの頃の事情を記してみたいと思う。

—開学準備のこと—

開学準備は平成6年の開学を目途に3年前から始まっていた。その前に、進学コース併設の是非、4大か短大か、などを関係者の一人であった友人の問い合わせがあったので、新潟にもいよいよ大学をつくる機運が起ったのかと思っていた。ところが、ある日、突然、新潟に来てくれないか打診された。まさか自分がその任に当たるとは思いもよらないことで、もちろん、とんでもないことですぐにお断りした。定年まであと数年と思っていたので、今更、新設の苦勞を背負いたくないというのが正直な気持ちだった。

しかし、聞けば短大は高田の県立中央高等看護学院を引継ぐ形で開設するということだった。高田の地は20代の大半を過ごした思い出の多い懐かしい土地であった。昭和29年に23才で勤めることになった学院では、看護とは何かという疑問をもちながら、ただがむしゃらに前にすすむような仕事をさせてもらったところであった。頼まれると意気に感じる性分で、結局は、開学準備から身の程知らずの冒険に挑戦することになった。“冒険と挑戦”は私の好きな言葉である。

準備段階の一番の難関はなんといっても教員組織をどうするかであった。公募で採用を予定できた教員はわずか数人で、主要科目を担当する殆どの教員は未定だった。準備室に入る1年前から、教員探しを始めた。しかし、当時は看護大学の設立ラッシュ真っ最中できわめて難しい状況にあった。

大学教員の経験をもつ人の数は、限られていたので臨床現場で活躍している意欲的な人へのしほりひとりひとり、精力的に探した。教員を求めていることを知って自分から申し出てくれた人もいた。なんとか一人を口説き落とすとその人が一緒に教員探しを助けてくれた。自分の勤めていた短大の教員を引き抜くと

いう奥の手も使った。しかし、志を同じくする人は必ずいる筈という思いが通じて、本当に臨床経験の豊富な強力な陣容を整えることができた。

文部省の教員審査の結果を通達される日は非常に緊張した。当日は予定時刻が大幅に遅れて廊下にまであふれていた人々が次第になくなり、残ったのは私たちだけになった。とても不安で心細かったことを覚えている。しかし、専任教員の審査は全員が承認され、帰りの新幹線は意気揚々とビールで乾杯しながら帰った。

開設の2年前に小林ミチ子先生が準備室に入って、カリキュラムのことなどの打ち合わせに毎月一回は埼玉まで連絡にきてくれて準備が始まった。その次の年に私と水口陽子先生が準備室に参加した。準備室の事務方のスタッフは室長以下8人、みんな有能で協力的だった。

しかし、今だからいえることであるが、その県庁の一年間はいろいろとストレスフルであった。宿舎では水漏れ事故を起こして階下の家々に平謝りに謝罪し、接触事故や氷った雪の塊にぶっつけて、車を修理するトラブルを数回起こすという苦い出来事もあった。

—学生とともに学んだこと—

教職員あげて大きい期待をこめて迎えたが、一期生の最初の1年は思わぬことが起こって戸惑うことが少なくなかった。

入学を許可し受け入れた学生はできる限り卒業までの学生生活が続けられるように援助し指導するのが大学と教員の責任であると思う。このことは私が50余年の看護教員として経験する中で出会ったいろいろの学生から学んだ信念ともいえる思いであった。

しかし、残念ながら途中退学した学生がいた。学生自身の意思で他の道を選択したものもいたが、学習や生活に適應できないで挫折したと思える学生もいて援助的な役割を果たしえなかった力不足を痛感した。

入学式を終えて間もなく、夜半に寺崎さんから「〇〇さんが救急車で病院に…」という電話をうけて幾度か病院に駆けつけたことがあった。過換気症候群で2、

3回受診した学生もいた。市内に一人でアパート住まいをしている学生にとって寺崎さんの存在は大きいものがあったと思う。

校舎は広くないが学生数に見合っており、いつも隅々まで清潔に輝いていた。警備や清掃管理に携わってくださった方々はみな地元の方々であった。まるで自分の家のように校舎を丁寧に丁寧に掃除してくれた。自分の娘か息子のように学生を温かく見守り、目に余るようなことがあると注意してくれていることもあった。日常的なふれあいのなかのこうした人間関係は、地方の小さい大学ならではの心うれしいことであった。本当に短大は地域の人々に支えられていると実感することが多かった。

—基礎的な看護実践能力の訓練—

当時は日本看護協会の一県一大学という大学設置促進運動が国や県を動かし、高度経済成長期であったことも幸いして看護大学の設立ラッシュは急テンポで進んでいた。高学歴化を望む社会の動向もあって大学進学率は上昇傾向にあり、看護職は8Kとか10Kといわれるにもかかわらず自立できる職業として社会的に評価されているので応募者も多かった。

しかし、看護教育の現場は、徒弟式教育からの脱却を目指したカリキュラムの改正後から、新卒業生の技術能力が低下しているのではないかという論議が起こっていた。だが、問題は改善されないまま20数年経過していた。医療技術の進歩が目覚しく、次々導入される新しい医療機器を使う技術を看護学生が臨床実習で体験できるかという限界があった。さらに「科学的看護」「考える看護」「看護過程」「看護診断」などということばが交わされるようになって、診療介助技術だけでなく、基本的看護行為である日常生活行動援助技術の訓練をも軽視する風潮も生じていた。

食事や排泄の世話、からだを清潔にすることは、家族付き添いも見よう見まねで行う行為である。しかし、いろいろの障害をもつ病人の世話はプロでなければ実施できない。そのプロの技術の基本をきちんと訓練することが重要である。

私は最初に技術力の低下が問題になったときから卒前・卒後の技術の習得状況について調査や検討をいくつか行い、それ以来、技術教育に関心を持ち続けていた。そこで臨床経験が豊かで実践的な教員がそろっている新しい短大ではこの看護技術の教育訓練を核

とするプログラムを実践したいと考えた。

それは基礎看護技術の学内演習を如何におこなうかであり、臨床実習の内容と指導方法をいかに展開するかであった。

まず、基礎看護技術の演習は、開学時に着任した6人の助手と講師2名に私も加わり、実習項目の一つ一つについて現場ではどのように実施しているかを検討して手順書を作成した。この作業は半年間続いた。手技についても全員で互いにチェックし合い、指導にあたる助手は毎日、熱心に練習を繰り返した。デモンストレーションは助手が順番に担当したが、猛練習の成果が上がり、島村澄江先生の何気ない仕草まで学生が真似するのを見て驚き感動した。

インクを白い紙に落としたようにくっきりとしたイメージが心象風景として学生の目ところ焼き付いたのではないかと思った。このことは私自身の体験でもあった。吉田時子先生に基礎看護技術を教えてもらったときの、先生の手のかかし方、からだの使い方が50数年前のことなのに今も目の底に鮮やかに残っていて、私自身の“わざ”を磨く目標となっている。看護教員が確かな技術力を持つことは技術教育では非常に重要である。

各専門領域に配置される助手は全員が臨床実習で日常生活行動援助行動を共通して指導できるように2年目に着任した者も1年間は基礎看護学技術の学内演習を経験してもらった。

演習は1ベッドに2人の学生を割り当て、相互に看護師役と患者役を体験することとした。初夏の頃であったが、患者役を終えた学生が、さわやかな顔で「とってもきもちよかった」といいながら、汗だくの看護師役を振り返って「でも清拭するのはとっても大変そう」と言うのを聞いて時代を感じた。あの学生は、今、どう思っているだろうか。

次に臨地実習を如何に展開するかであるが、原則として各科目の授業内容と方法はそれぞれの担当教員の責任において決定するものである。しかし、看護の展開方法や実習内容の枠組みなどを統一することとして、臨床実習開始前に討議を行い、臨床実習要綱を作成した。

実習指導は、教授以下の全教員がそれぞれ専門領域の臨床指導科目を担当し、実習施設に出向くことを申し合わせた。

実習形式は受け持ち患者方式を主とし、さらに専門領域別に症状観察を含む技術項目を設定して看護技

術経験録を作成して積極的に技術項目を体験するようにした。

実際には実習病棟の状況によって全学生が同じように体験できるとは限らない。日常生活行動援助技術を除く診療介助技術や症状観察の学生の体験状況にはばらつきがあり、項目の見直しと実習方法の検討など継続して検討する課題と考える。

平成14年3月に文部科学省から「看護教育の在り方に関する検討会」の報告が出された。看護専門職として最低限身につけておくべき技術教育の内容と方法に対する提言である。「最低限必要な知識と技術を体得し、卒業直後といえども独力で、または適切な指導・助言の下に看護ケアを実施できること」「将来さらに専門性を深めていくことのできる基盤を身につけること」として、看護の展開方法、看護技術項目の設定、臨床実習指導体制の充実などが取り上げられている。

短大では提言が出される約10年前から看護技術に軸足を置いた教育を行ったことになる。しかし、新しいことではない。むしろ、忘れられようとすることを流れに逆らって取り上げたのではないかと思う。その成果はすぐに明らかになるとは限らない。卒業生の5年後、10年後の仕事にどのように生されているかを確かめてみたいと思う。

—看護情報を発信する—

看護学はナイチンゲールを始祖と考えてもわずか140年余でまだまだ若い学問分野である。私自身の看護研究への取り組みは20代半ばの頃、中央病院でいつも暗い表情で苦痛に耐えている若い女性に有効なケアを提供できなかつた経験が原点になっている。患者さんの苦痛をやわらげる有効な看護方法とその根拠を探す旅の始まりであった。それは一緒に勉強する仲間づくりの始まりでもあって、病院の看護師さんに呼びかけてささやかなグループの手探りの勉強会をつくった。しかし、手探りの勉強会は長続きしなかったが、東京看護学セミナーで「具体的実践を通して看護学を創ろう」という学習サークル活動につながった。

助手の方々は殆ど病院の中堅スタッフとして働いていたが、短大の基礎づくりにもっとも貢献してくれた人々で心から感謝したい。その助手の人たちに勉強会を始めることを呼びかけた。手っ取り早く言えば横文字を読む会であった。“いや”といえないで参加し

た人もいたのではないかと思うが、みんな真面目に宿題をこなして参加した。そのときには報告内容と現実と自分たちが経験していることをいろいろ関連づけて話し合うのが常だった。私にとっては楽しい時間だった。山梨県立看護大にいかれた水戸美津子先生は貴重な体験であったと言ってくれているが迷惑に思っていた人がいたかもしれない。メンバーの入れ替わりはあったが、勉強会はナイチンゲール著作集の抄読や看護研究に関する本の翻訳などと続いた。

そうこうしているうち短大の就職前に行ってきた調査をまとめて報告する人、意欲的に大学、大学院にすすむ人が増えてきた。短大での職務に支障をきたさないことを約束してもらったが公私共にきびしい条件のなかでみんなよく勉強をつづけていた。

一期生の卒業後、基礎看護技術の学内演習と各科目の臨床実習の展開等について「看護実践力を育てる技術教育の実際—看護技術教育をこう考える」を雑誌「看護教育」に報告した。(看護教育、39巻第1号～第8号連載)

看護教育現場の人々から一定の評価を受けたと思う大きな反響を与えるまでになりえなかったことを残念に思っている。看護情報の発信はささやかであったが、今は卒業生に期待している。

—終わりに—

「これからの看護」をまとめられたブラウン博士が来日されたときに語られたのであるが“大学教育が行われるようになってレポートは山のようにつくられている。だが、看護ケアの質は、それ以前より低下していると感じる。皆さん、われわれの轍を踏まないで下さい”という言葉が胸のうちをとどこき去来する。

短大の卒業生はプロとしての確かな看護技術が身につき、それぞれが自分の技をさらに磨いているだろうか、一人一人の病人のケアで看護方法に対する疑問や問題に直面するとき、問題を解決し改善する力を発揮しているだろうか、などと考える。

短大創設期のころを振り返ってみて短い時間の中でいろいろの経験をさせて頂いたと改めて思った。自分一人の力で行えたのではなく、ともに働いた教職員の方々と協同でき支援があったからと思う。短大を去る日、充実感と満足感をもてたことを感謝している。

(新潟青陵大学教授)